

ぶら探訪

その 23

尾道を歩く「パート③」(鍛冶屋町小路から渡し場通りまで)

秋風に誘われ心も軽く、過ぎ去った商港の繁栄の証を探してぶらりぶらりと商都「おのみち」の足跡をたどりましょう。

そこかしこに残る路地には井戸がまだ残っており、九州・北陸の間屋との商取引跡が見られる住吉神社の石造物を観察すれば、さらに興味が高まり尾道の魅力を再発見できるかもしれません。

「ぶら探訪の醍醐味」を満喫できるお散歩感覚の尾道歩きを楽しみましょう。



薬師堂濱のクレーン(現在は公衆電話にしてモニュメント)



路上観察も興味津津。



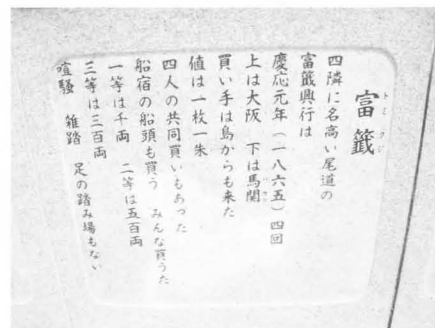
中浜通り角にある「道標と説明碑と井戸」



尾道近代化遺産の「元宮邊海産」のビル。



文政3年6月とある最古と思われる標柱。



富籤興業について注目してほしい。

平成 26 年 10 月 4 日(土)
備陽史探訪の会 (近世・近代史部会)

岡田 宏一郎

ぶら探訪 「尾道歩き パート3」のコース順路図と 見どころの場所(●印)



空白のスペースがあるので「小路について試験」をします。と言っても驚いたり、怒らないでください。遊びのページですから「マジ」にならず、ジョークとしてやってみてください。

問題 下の小路(通り、町)の中で「尾道歩き パート1～パート3」で歩いているところ(パート3で歩く)以外の小路を選び○をつけましょう。

- | | | | |
|------------|-------------|--------------|---------------|
| (1) 荒神堂小路 | (2) 薬師堂通り | (3) 鍛冶屋町(小路) | (4) 石屋町小路 |
| (5) 小川小路 | (6) 水尾町(小路) | (7) 鎮神小路 | (8) 橋本小路 |
| (9) 築出小路 | (10) 築地小路 | (11) 今蔵小路 | (12) 杓屋小路(叶町) |
| (13) 観商場小路 | (14) 丹花小路 | (15) 三好屋小路 | (16) 風呂小路 |
| (17) 浮御堂小路 | (18) 石畳小路 | (19) うずしお小路 | (20) 飴屋小路 |



中国銀行尾道支店の建物。中国銀行は石造り屋それに似せた造りをしているのが特徴である。この銀行の右(西)に西原銀行(その後中国銀行になる)があった。



この小路が鍛冶屋町で刀鍛冶が住んでいた。鍛冶職人の町で戦前には二十数軒の鍛冶屋などがあり、船具や碇などを作っていた。や



石柱には「中世 其阿弥など刀鍛冶」が住んでいた。其阿弥の碑は長神社にある。左に足跡のモニュメントがある。駅前の美美子像近くにもある。



小路を行くと鍛冶屋はなく、家屋が壊され古い蔵や建物が見えるので目が止まる。



この通りが「浜の小路」である。途中に元証券会社の戦前の建物がある。



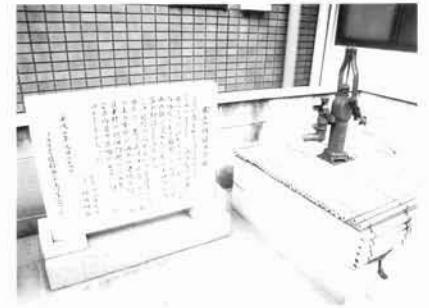
浜の小路を下って来たところ。右の駐車場とその隣の敷地に「安田銀行尾道支店」があった。黒い土蔵造りの昔ながらの建



この敷地の左側が安田銀行の建物跡である。



中浜通りの角に「出雲大社道」の道標が建てられている。「本道卅七里 近道卅三里」とある。



出雲街道の標石。この道標は旧出雲街道に立っていたもので、大森銀山の銀を運んだ銀山道の繁栄を示すものである。この道標前から出雲往来を北へ辿ると先ず美の郷の三成、ついで木の庄市原と畑の一里塚を経て道は市村(現御調町)に入る。この街道の道幅は七尺(約2.12m)のきまりであった」とある。横の「井戸」も注意して観察しよう。



「彦の上」渡しがあった住吉浜の岩壁のフレン。昭和20~30年代には動いているのを見ている。今はかつての繁栄ぶりを残したモニュメントとして保存されている。



内部を覗く。右には運転部分の機械があり、左は「公衆電話」になっている。面白い試みである。



対岸の向島「彦の上」地区の風景。岩肌が見えるところが石切り場で昭和20年代ごろは石を割る音がしていた。海岸には石の破片が多量に散らばっている。



住吉浜の岩壁。昭和30年代ごろはガンギがあった。以前は島々に生活物資を運ぶ小さな「渡海船」がガンギに船板を掛けて荷物の上げ降ろしをしていた。右の倉庫は戦前からあったが昔とは違い少し変わっている。



中央の建物が「尾道商工会議所」である。左が「中央棧橋」で、以前は島周りの客船でにぎわっていたが、今は寂れてしまっている。



住吉神社。右の石壁に「周旋方 総問屋中住吉講中 締方」などの名前がある。



以前にはまだ数棟残っていた蔵が、今はこの一棟だけになってしまった。江戸時代からの蔵と思っている。



境内に入ると入口にある常夜燈。「文化二乙正年月」とある。



「天照皇大神宮」の碑で「萬延元庚申」の和暦がある。



手水鉢には「角鬮屋」(灰屋橋本家)と「津国屋」の屋号と「佐助、弥助、惣兵衛…」などの名前がある。



こちらには「中 灰屋」と「大紺屋 出店」の屋号とそれぞれの名前が刻まれている。



左が「木□□神社」拜石。〈□は読めなかった〉後ろの玉垣には、それぞれの商標と三原、広島の間屋の店主の名前がある。「松長東町 壇上善助」の名前が気になった。



カ石が置かれている。これには「カ石 西濱五十三メ目 新助 長造 彌助 和七 甚二 清八 佐助 金助」の名が刻まれ「嘉永四辛亥五月吉日 石徳作」とある。



「カ石 四十七メ目 久八 長藏 半兵衛 □助 五助 彌七 □□ 和七 左平」の名前が刻まれ「天保十巳六」と(1839)の年号がある。



これは「さし石」で「甚次」の名前がある。



標柱が海側に向かっているのは、こちらが神社の玄関であったことによる。この標柱(注連柱)には「文政三年庚辰 六月吉日」とあり、「石工 棟梁 山根源四郎藤原傳篤作」とある。文政三年の刻銘は標柱にある年号としては最も古い年号だといわれている。



玉垣には「紀元貳千五百三拾七年 維明治十年 第一月日曜」とある。また「石工 島新七 石垣文助」とある。



玉垣には、尾道住吉浜に寄港した各地の国名と湊や船主名が刻まれている。地域は日本海側の各地や九州、瀬戸内海の地域の国名が見られ、広範な地域の船が寄港し取引が行われていたことが分かり、尾道の繁栄ぶりが分かる。



取引している問屋の商標(マーク)が特徴的で面白い。ここには「備前利生 豊後 防州 唐津呼び子 壹州郷之浦 讃州室木」などの国名と「大神丸」などの船名や船主名があるので興味がわく。



「越後糸魚川 青海 高田 荒川」などの名前がある。糸魚川では尾道石工の狛犬や常夜燈などの石造物が見つかった。



「防州福川」や「肥前 豫州宇和嶋田部山 但州豊岡」などの名前がある。尾道湊に各地から北前船、弁才船が荷物を運びこみ取引していたことが分かる。したがって海岸には蔵が多く作られ、問屋や倉庫業、商品を担保にした金融業が発達していた。



玉垣には「越后、佐渡、尾張常滑」などの地域の名前がある。この地方からも船が尾道に寄港して取引をしていたことが分かる。



「小川久兵衛回漕店は土堂にあった海運業者の店である。『松永 中ノ町丸山茂助』とある名前に注目した。



尾道商工会議所の建物。以前は土堂の「奉行所跡」の所にあった。この建物の前は中央棧橋の建物があった。この棧橋には島周り航路の客船が発着していて、戦前にはこの一帯は賑やかなところであった。。



住吉神社の社殿を後方から見る。この濱は芸州藩の平山角左衛門が尾道町奉行として寛保元年(1741)に埋め立てを行い、活躍したのが町役人の町年寄豪商の鱒屋三郎右衛門、泉屋彦右衛門らで、埋め立てが完成すると浄土寺にあった住吉明神社の神殿をこの地に移した。平山奉行の徳に感謝して境内に「平山霊神社」を祀っている。(平山角左衛門は尾道の名誉市民である) 明治29年には濱問屋の人々によって平山奉行の頌徳碑が建てられている。(墓は浄土寺にある)



ここが寛保元年に埋め立てられた住吉濱で「大正十三年の尾道市勢要覧」には「外ハマ町」とある。



中浜通りと角にある戦前からの建物。以前は本屋だった。



荒神堂商店街の中ほどにある「神泉」と刻まれている井戸。今も使われている。



荒神堂商店街を抜け本通り側から見たところ。昭和50年代頃とと思っているがここも火事で焼けている。



この小路が、西橋町で「西京町小路」とも言っている。風情のある小路で、左の三階建ての家屋は、元カバン屋であった。



石川小路にある井戸。「西土堂」と井戸枠に彫られている。



小路を抜けると建物疎開で広げられた道路(新国道と以前には云っていた)線路の向こうが「信行寺」(浄土宗)で墓地には「尾道志稿」(江戸期の尾道歴史地誌)を書いた「龜山土綱」の墓碑がある。



江戸期からカギ形に折れている角に「尾道郵便局」がある。以前は本局と誰もが呼んでいた。



左が「広島銀行」(旧整備銀行)建て替える前は堂々とした石造りの建物だった。建物疎開でこの「築出小路」は広げられたが、昭和六年の地図には「津ノ国屋小路」とあり、この東側には「蓮花屋小路」があった。



戦前ここに湊座という芝居小屋があった。ミヤコ蝶々も戦前、ここで芝居をしたことがあったという。 - 4 -



「旧築出町」の案内板。戦前はこの一帯は賑やかで問屋、芝居小屋、小さな商店、市場などがあり繁栄していた町であったが昭和20年の建物疎開で道が広げられて変わってしまった。



「築姫小路」 この小路名は新しく付けられた小路名である。奥に稲荷社がある。



築姫稲荷の案内板。戦前には、この旧築出町の小路には二体の「お稲荷さん」があり「築姫さん」と呼ばれていたが、昭和20年の建物疎開で駅西の新浜町に移された。それが平成20年にこの地に遷座された。



築出町にあったお稲荷さん。右が「築姫稲荷大明神」で「明治33年建立」されたもの。中央が「昭和9年に建てられた「築玉稲荷大明神」である。左端にあるのは「恵比須社」で、戦前に築出町にあった「大正十二年」の建立。



この通りが「渡場通り」(渡場町)で手前の本通より北の通りは「磨屋小路」(昭和六年の地図)と言われていた。どちらの小路も建物疎開で拡張され広い通りとなった。



千光寺の上り道にある「旧天野春吉の邸宅跡」の石垣を見る。(通称 天春の石垣といっていた) このみごとな石垣の築き方は尾道石工の技を示すものである。



渡し場の西、この前の海岸に尼崎汽船の棧橋があり発着していた。戦前のころである(昭和6年の地図を参照)



荒神堂浜の風景。戦前はにぎわっていた。道の右角のあたりに「警察の派出所」が昭和21～22年頃まであった。



尾道の歴史と繁栄の様子が彫られている。



中でも「富籤」について注目してほしい。



向こうの海岸辺りに明治期に魚市場が開かれていた。



右側あたりに戦前「港座」という芝居小屋があった。



ここで例によって「クイズ」です。

前に見える、向島の兼吉に見える建物に「ろ」と書いてある。子供のころは蔵づくりで、「ろ」はあるのに何んで「い」や「は」之文字がないのかと不思議だった。さてこの「ろ」は何でしょうか。テレビで放映されたこともあるので知っているかと思いますが、答えは？



おまけの写真。 テレビで放映された「てっぱん」のロケ風景の看板。 渡し場のそばにあります。

次回の予告写真。 次回の尾道歩きはこの生活感あふれる小路を歩いて「浮御堂小路」で出ます。 次回も街歩きを楽しみに期待してください。

空いたスペースがあったのでおまけの文章です。

志賀直哉が尾道に住んでいたのは「大正元年の11月から翌年の五月までの半年足らずである。その時のことを千光寺登山道にあった三軒長屋に住んでいた部屋から見た光景を「暗夜行路」に描写した場面である。

「景色はいい所だった。寝ころんでいて色々な物が見えた。前の島に造船所がある。そこで朝からカーンカーンと鉄槌を響かせている。同じ島の左手の山の中に石切り場があって、松林の中から石切人足が絶えず唄を歌いながら石を切り出している。その声は市の遥か高い所を通過して直接、彼のいる所に聴こえてきた。……」

(その石切り場が対岸に見えるところである)



江戸初期にみる尾道繁栄の様子について

住吉神社には興味を惹かれる石造物が多い。玉垣には越後・九州、瀬戸内の各地から寄港した船の国名と船主(船頭)名が刻まれているので注目するのである。

これを見ていると江戸期から明治初年にかけての尾道港の繁栄ぶりが分かる。そこで江戸期における尾道の繁栄ぶりについて紹介しよう。

「筑紫紀行」(享和二年 1802)には尾道の様子を「町屋五六千軒あり。町通り家居の様など上方に替わる事なし。商家は万の間屋おほし。肴の市、野菜の市たつ。穀物・干鰯・綿種(わたみ)・塩などつめる船ども、諸国より夥しく幅轆す。……さて東南のかたの町端(はずれ)に、築出しの新地あり。此の内皆酒屋にて、芸子女郎などあり。……魚物・青物を女の売りありくこと鞆におなじ。」と、その繁栄ぶりを描写している。

享保期から文化初期頃に書かれた「芸備郡要集」(異本「理勢志」)は「広島領内の安芸国8郡、備後8郡の経済力と各郡の民力の比較を試みた地方書である」

これには尾道について次のように書かれている。「尾道は駅所ニ而後地村の内なり。……尾道者、栄にて有徳者有。都而寺社多く四拾八ヶ所所有之といふ。(中略)扱此浦船着にて干潟無之町裏江直ニ大船つき、積荷等小船の小越なく直に取揚げ、陸地も直積相成故、大に便利宜、船頭・問屋共勝手を得。(中略)

尤陸地も西国往還筋にて海陸運送并利宜場所故、諸荷物融通交易の業最安ニ付、入津弥増諸荷物取捌の間屋四拾軒程有之由。是等口銭として売買物之代銀に歩銀を務とする業故、思はさる大儲する事もあり、商船不来時は難儀も致し、何分盛衰之候得共、一体商ひ致し能場にて風来者も入湊ひ、殊外人多くにて家居宜甚空地なく、町内にては少々の作毛なく、居所に悶候也。(中略)新地には遊女場屋も有之、他客入来夥敷なり。」と書かれている。

このことから豪商などの財力によって寺社が維持されていることが分かる。また干潟がなく直接大船が接岸でき、商品の直揚げ、直積の有利さが運送費の軽減につながり大船の紀行を増加させ問屋商事の営業を活発化させた。また西国街道が町中を通っていることも有利な条件である。ただ、中継ぎ問屋商事を中心にした経済繁栄は不安定で、他国船がもたらした商品の販売を仲介し、口銭を取る業務が中心では、競争が激化し、沖乗り航路が増えると尾道には北前船の寄港が減少し江戸後期には有力問屋の没落が見られ、それに代わって金融資本による灰屋(橋本家)などの新興商人が台頭してきます。

流通商品と流通経路については「図」を見て欲しい。

(引用及び参考文献 「尾道大学地域総合センター双書2 徳川期尾道の経済構造～問屋商事の展開を中心に～ 勝矢倫生」 「芸備郡要集(理勢志)」 「広島藩地方書の研究 勝矢倫生 英伝社」 「北前船と尾道湊との絆 榎本慶彦 文芸社」 「尾道市史 第2巻 第5巻」

長くなりましたのでここまで。機会があれば、会報などで江戸期における「尾道の豪商の繁栄と衰退、変遷」について紹介できればと思っています。

図1 徳川期尾道町の都市機能

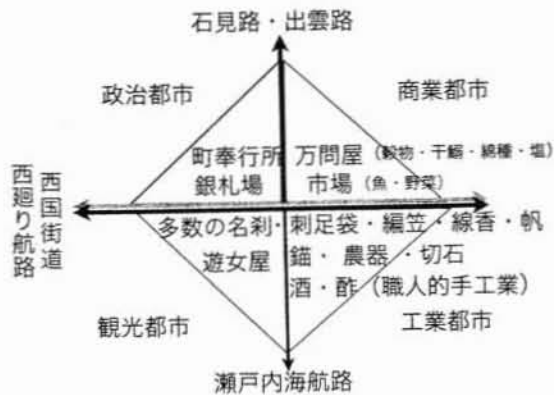
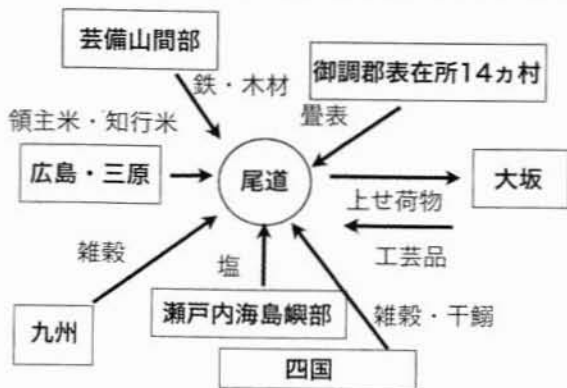


図3 徳川初期(17世紀中期)尾道町の商品流通構造



出所) 中山富広「近世初期の尾道における商品流通」
 (『日本研究』3号) 図1をもとに改変。

表4 正保3年～明暦2年における尾道への商品出荷地域

種別	広島領内	領外
大麦	広島・竹原・蒲刈島・大崎島・瀬戸田・三原・因島	備前・高松・新居浜・今治・中島(伊予)・中津(豊前)
小麦	宮島・竹原・蒲刈島・大崎島・梶山田村・向島・因島	備中・川之江・三島・今治・弓削島・岩城島・伯方島・松山・藤原・林・青山(伊予)・府内(豊後)
大豆	広島・忠海・三原	鞆・大坂・拝志(伊予)・平戸・唐津(肥前)・筑前・佐土原(日向)
小豆	広島・竹原・三原・因島	川之江・三島・松山・青山(伊予)・平戸(肥前)
胡麻	広島・三原	中津(豊前)
干鰯		松山(伊予)

出所) 土井作治『幕藩制国家の展開』386～7頁表156を改変。

(尾道大学地域総合センター叢書2)

徳川期尾道の経済構造 ～問屋商事の展開を中心に～
 勝矢 倫生 図及び表、写真を転載)



図9 平山角左衛門像
 (住吉神社蔵)

出所) (青木茂『新修尾道市史第3巻』尾道市役所 1973年 622頁より転載。



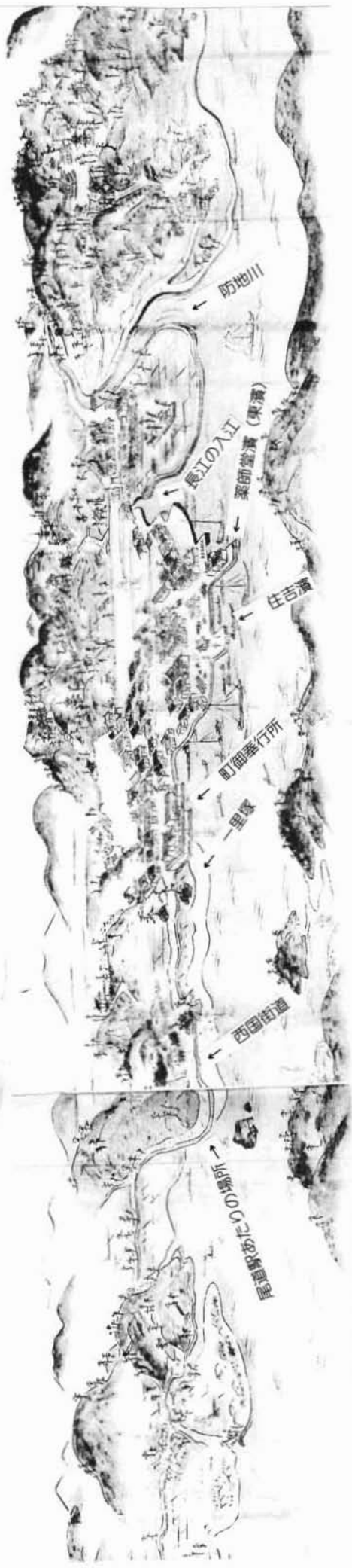
「弁才船 慶徳丸の模型」(北前船主 広海家寄託)

表8 「寛政13年(1801年) 尾道・いわし屋 入津の越後廻船」
 尾道市・青木茂氏所蔵文書「寛政13年 客衆上下帖」より

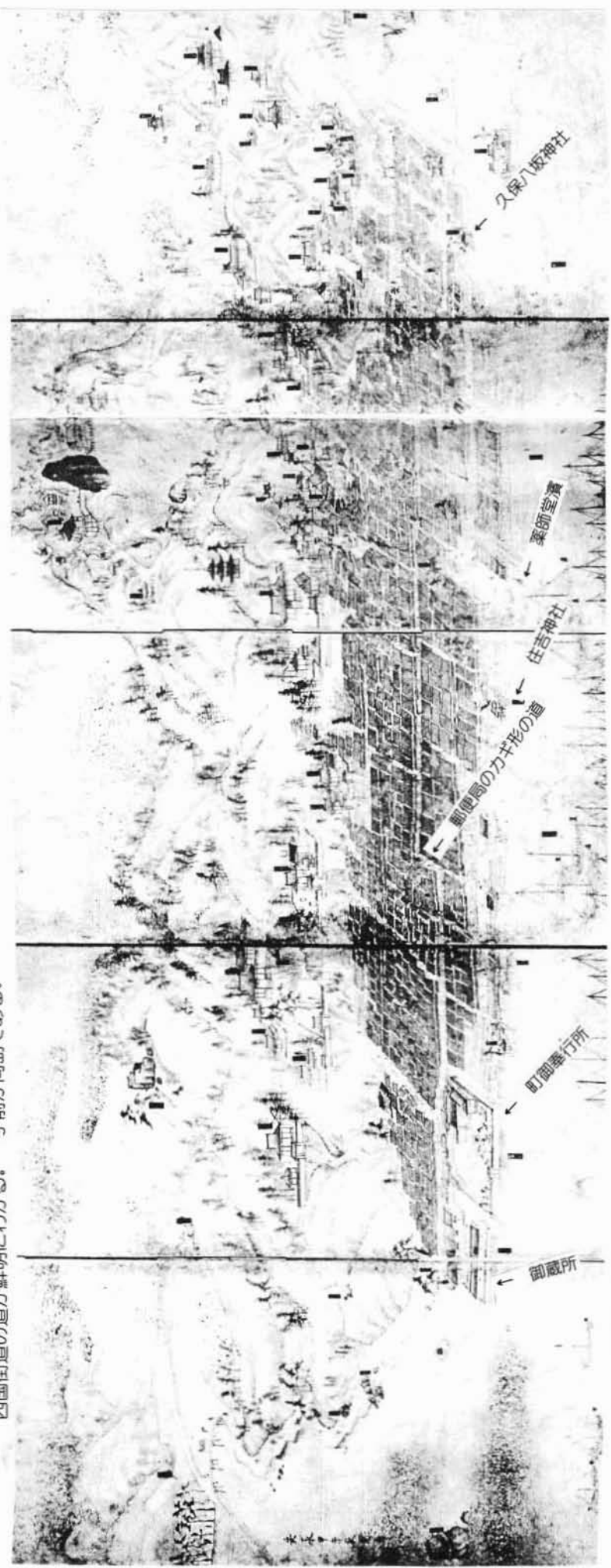
(北前船と尾道湊との絆 榎本慶彦 文芸社 より表及び写真を転載)

大津 年月	往所	船主	船名	上・下 廻
1.17	押上	中村五右衛門	五郎丸	上
1.20	押上	伊藤四郎右衛門	妙丸	上
1.21	押上	中村吉郎兵衛	幸徳丸	上
1.22	押上	小林吉右衛門	小林丸	上
1.23	押上	尾崎伊左衛門	永徳丸	上
1.24	押上	岡本兵七	春日丸	上
1.28	押上	岡本久次郎	八幡丸	上
2.1	押上	岩崎善右衛門	山一丸	上
2.3	押上	岡崎久左衛門	明徳丸	上
2.5	押上	岩崎定四郎	永徳丸	上
2.11	押上	岡本兵七	春日丸	上
2.15	押上	岡崎長茂	大元丸	上
2.15	押上	池原仁兵衛	幸徳丸	上
2.18	押上	内田辰次郎	観興丸	上
2.16	押上	風刺三郎右衛門	竹原丸	上
2.20	押上	田中七郎右衛門	朝風丸	上
2.21	押上	水越新七郎	神風丸	上
2.23	押上	水越次郎右衛門	徳現丸	上
2.28	押上	内山春一郎	宮徳丸	上
3.1	押上	岩崎正兵衛	十二丸	上
3.1	押上	内山善左衛門	加福丸	上
3.1	押上	池原長次郎	加福丸	上
3.1	押上	水越長五郎	加福丸	上
3.1	押上	井合藤兵衛	加福丸	上
3.1	押上	荒田岩三郎	加福丸	上
3.1	押上	小林与次左衛門	加福丸	上
3.1	押上	長浜庄之助	加福丸	上
3.1	押上	伊藤四郎右衛門	加福丸	上
3.1	押上	伊藤吉三郎	加福丸	上
3.1	押上	中村兵六郎	加福丸	上
3.1	押上	岡本久次郎	加福丸	上
3.1	押上	中村五郎左衛門	加福丸	上
3.1	押上	伊藤其七郎	加福丸	上
3.1	押上	岡本初太郎	加福丸	上
3.1	押上	松本仁三郎	加福丸	上
3.1	押上	岩崎善右衛門	加福丸	上
3.1	押上	中村兵六郎	加福丸	上
3.1	押上	岩崎兵衛	加福丸	上
3.1	押上	田中六左衛門	加福丸	上
3.1	押上	田中九左衛門	加福丸	上
3.1	押上	津屋長左衛門	加福丸	上
3.1	押上	岡本兵七郎	加福丸	上
3.1	押上	岩崎善右衛門	加福丸	上
3.1	押上	片岡清三郎	加福丸	上
3.1	押上	内田辰次郎	加福丸	上
3.1	押上	岩崎善右衛門	加福丸	上

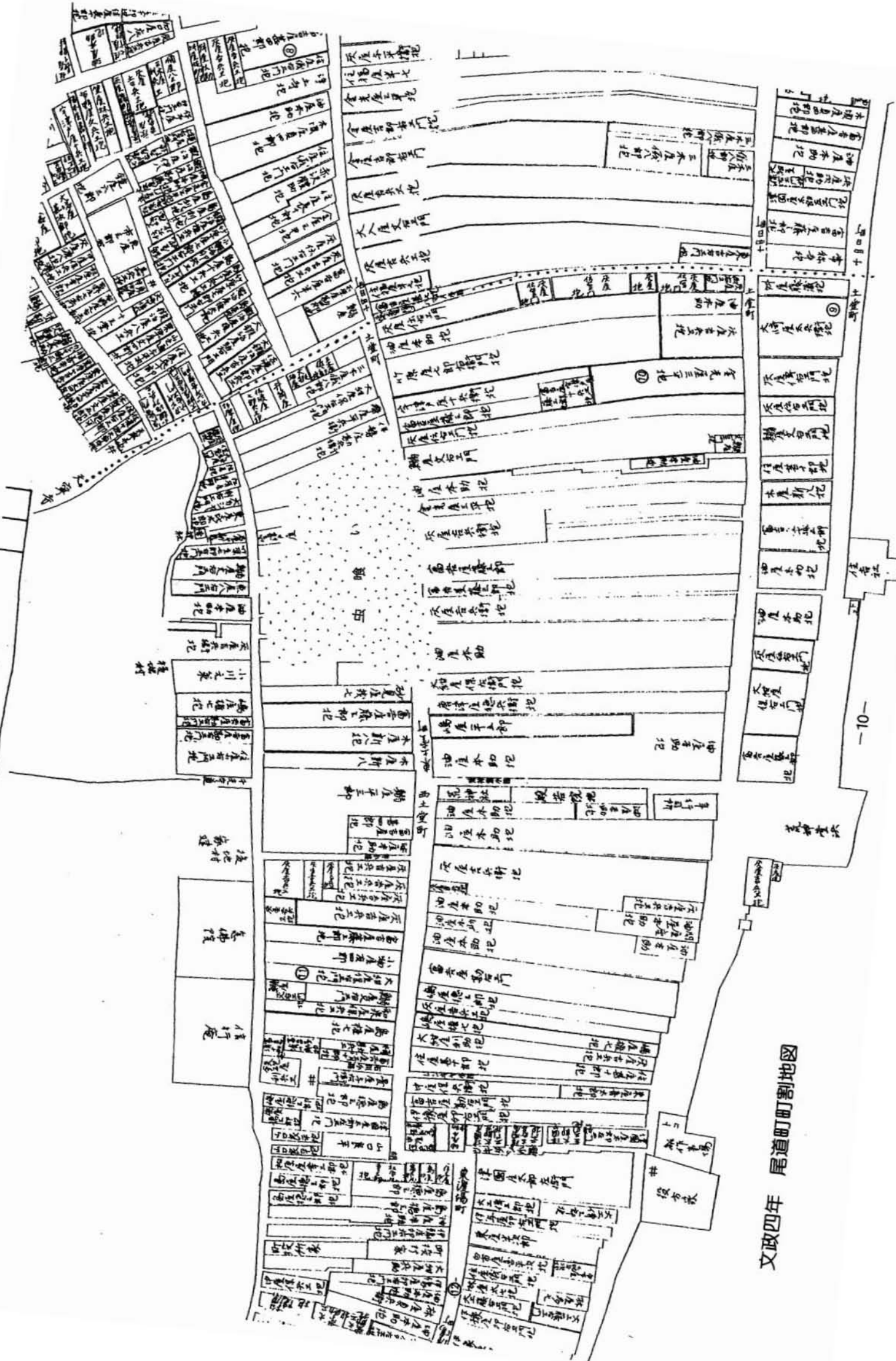
寛政13年「客衆上下帖」
 青木茂氏所蔵文書



〔山陽道 江戸時代図誌 20 筑摩書房より〕
 「文化九年の尾道図」である。「防地川、長江の入江、住吉浜、一里塚」が見える。
 西国街道の道が鮮明にわかる。手前が向島である。



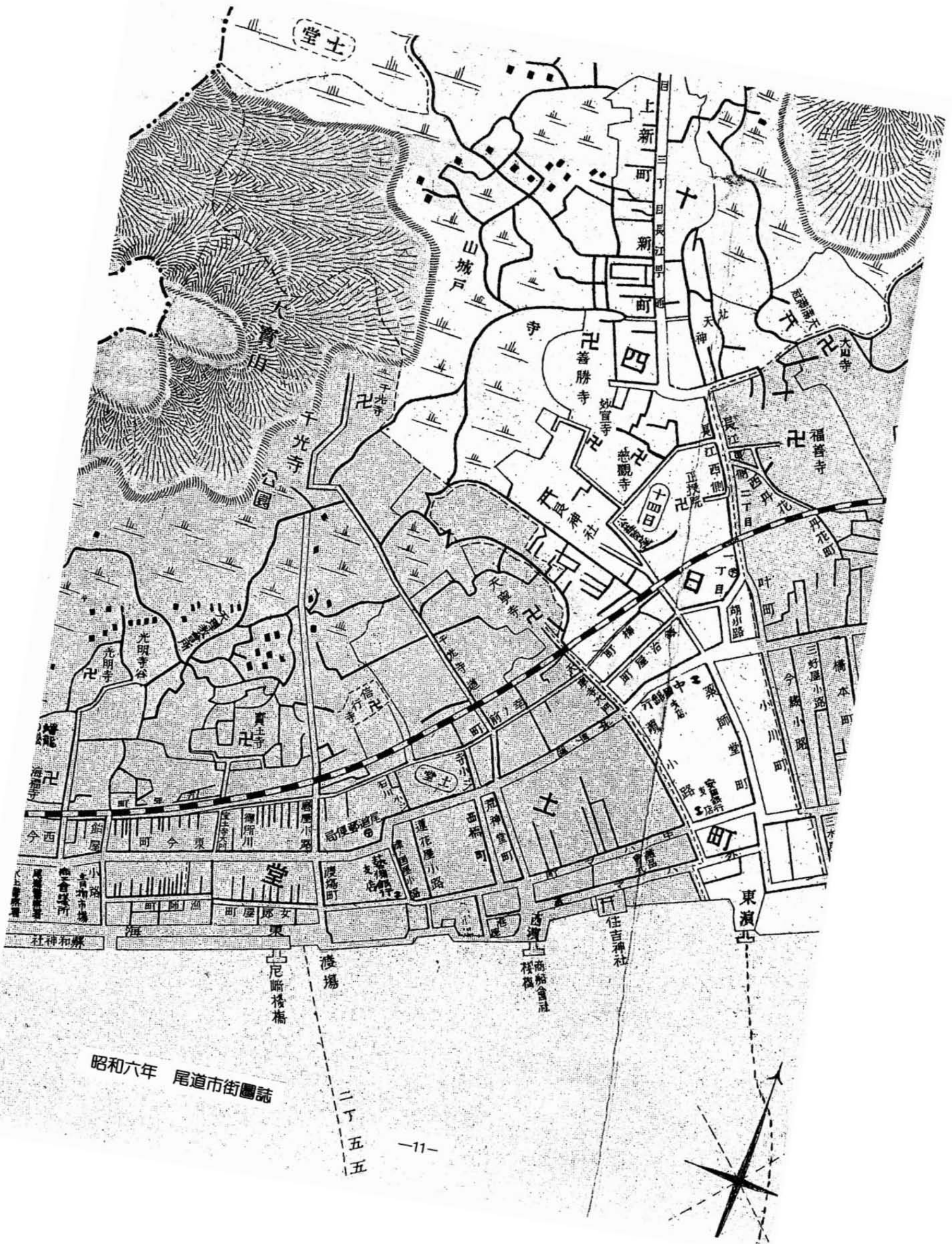
安政期の尾道（尾道絵屏風） 船の帆柱と町並みに港町尾道の繁栄が分かる。左に奉行所がみえる。
 〔山陽道 江戸時代図誌 20 筑摩書房より〕



文政四年 尾道町町割地圖

尾道町

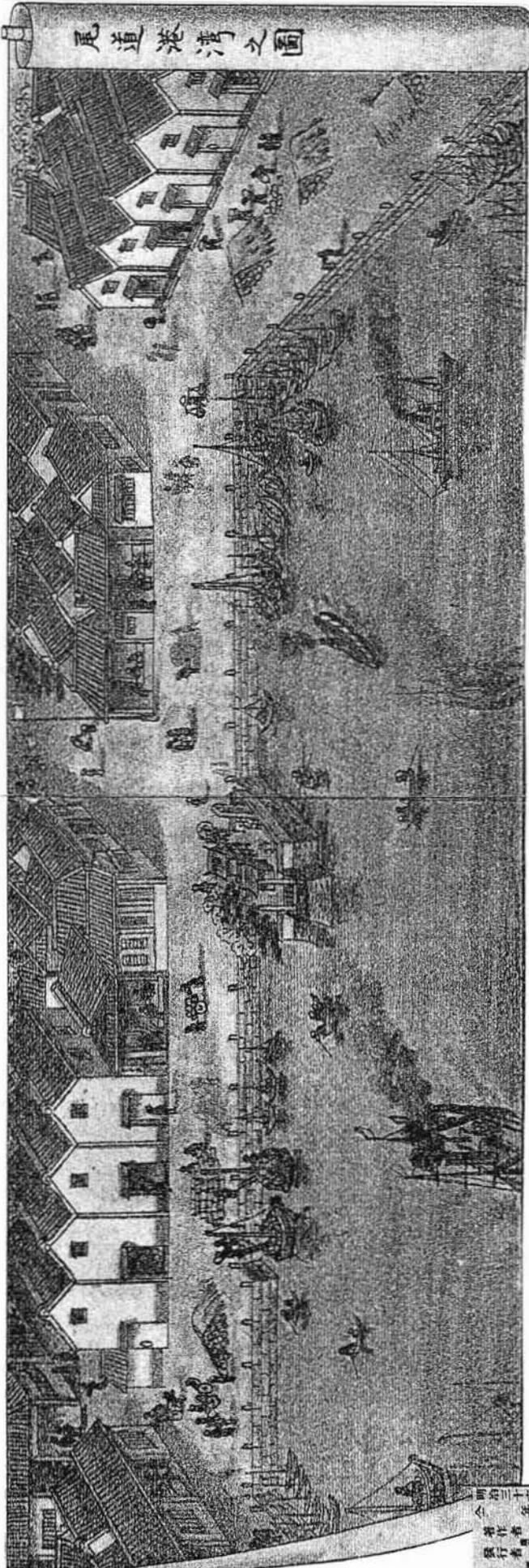
尾道町



昭和六年 尾道市街圖誌

二丁五五

尾道港湾之圖



鍛冶町 十四日本町裏、鍛冶數多住す。

樂師堂濱 十四日町南

此地成福寺樂師堂の前に當るを以て云。此濱を築出せしこと、元和以後の記録に見へず、必其以前なるべし。又毛利侯此地に船を繫しとも云。
又、此地より西濱辺船着のため石垣を築出せしは、元祿二年巳九月、町年寄五郎右衛門勤役中なり。

住吉新地 同厚邊邊

東土堂町濱辺より十四日町濱へかけ、東西凡九十間余、南北八間の新地を築、住吉神を鎮座せるは、元文六年辛

荒神堂濱 土堂町南

此地荒神社の後にあるを以て云。此地を築出せしは元祿三年午三月、縣令今枝君の代、町年寄孫右衛門在役中なり。
又、東土堂町濱南へ七間ほど、西土堂町濱南へ五間程築出せしは、元祿十年丑正月、縣令平山、米田、山崎の三君へ上訴し、同年二月許免。

幸之前 東土堂町北裏。

幸之神の鎮座まします前なるゆへ名つけし也。

寺小路 西土堂町北小路。

此辺は古へ福善寺の舊地なれば、寺の字を以て名とす、詳に塔寺の部に載。

渡シ場町 同本町。

向嶋への津口なれば名つくるなり。

漁師町 土堂町西浦邊。漁者數多住す。

土堂町 常磯三分ノ一を云。一曰、御所町。

塵縁に云。古へ此邊に辻堂ありし由、さすれば辻堂町と稱すべきを、土人辻を土と誤り唱て名とすとぞ。古老の傳説に、此地の荒神祠は舍人親王を祭れり、因て都て此辺を御所と云とぞ。

明治三十六年三月十日發行
 三月六日發行
 著作者 島路東右衛門
 發行者 土屋所三郎
 發行所 東京市
 印刷者 田村實助

尾道志稿

卷之一



明治 40 年ごろの住吉浜と住吉神社の風景。
 「雁木」(がんぎ)の上に荷物が積み上げられている。船は和船である。右端の向こうに市役所が見え、
 中央に蔵が並んでいる。 ふるさとの思い出写真集 尾道 図書刊行会 より

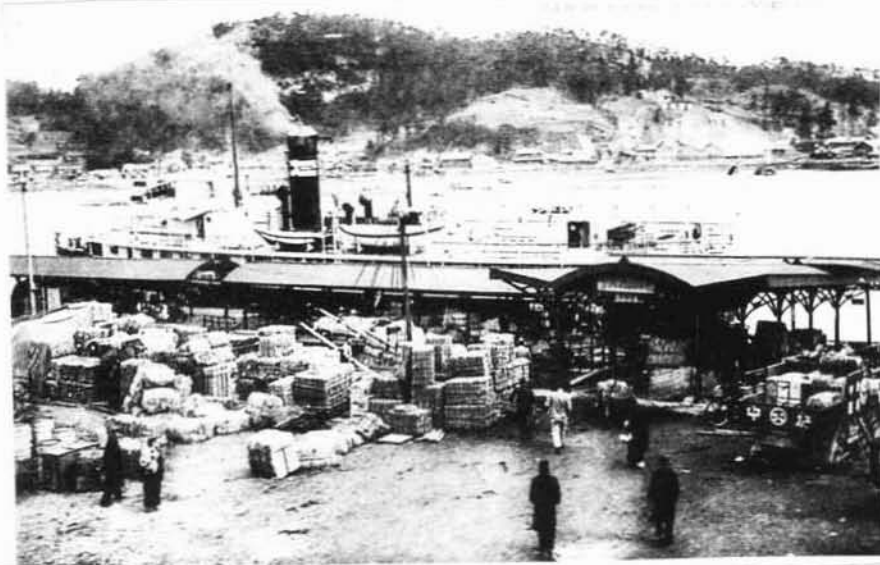


昭和 28 年ごろの住吉浜の風景と雁木 (がんぎ) ふるさとの思い出写真集 尾道 図書刊行会 より
 右の石段 (がんぎ) は昔、どこの港でも見ることが出来た。 左の渡海船は島々に生活物資などを運ぶ
 船で、船板を潮の満ち引きによって雁木の高さに合わせて架けて荷物を運んでいた。



昭和 30 年ごろの住吉浜の風景を海から見る。
 倉庫が建てならんでいるのが見える。山の中腹には西國寺の三重塔が見える。
 右のビルは「宮邊水海産 (株)」の建物で、この時は営業していた。

ふるさとの思い出写真集 尾道 図書刊行会 より



荒神堂濱大棧橋（現在の中央棧橋）

昭和初期の風景。山積みされた荷物が棧橋の賑わいを物語っている。戦前は荒神堂濱には商店、食堂、土産物屋、交番などがあり活気あふれる広場であった。

（ふるさとの思い出 尾道 国書刊行会より）



明治 29 年～30 年ごろと思われる尾道市街の風景。

景全街市道尾後備

左下の広場は明治 30 年末に営業を開始した「尾道電燈株式会社」（火力発電所）の土地である。

そば（西）の森が海徳寺である（大正 15 年に焼けて、旧筒湯小学校の上に移転した）

中央右の白いところは山陽鉄道建設によって切り通しになったところ。その上が「福善寺」である。がけの左の森が、前回歩いた「丹花小路」（常夜燈があったところ）のところである。

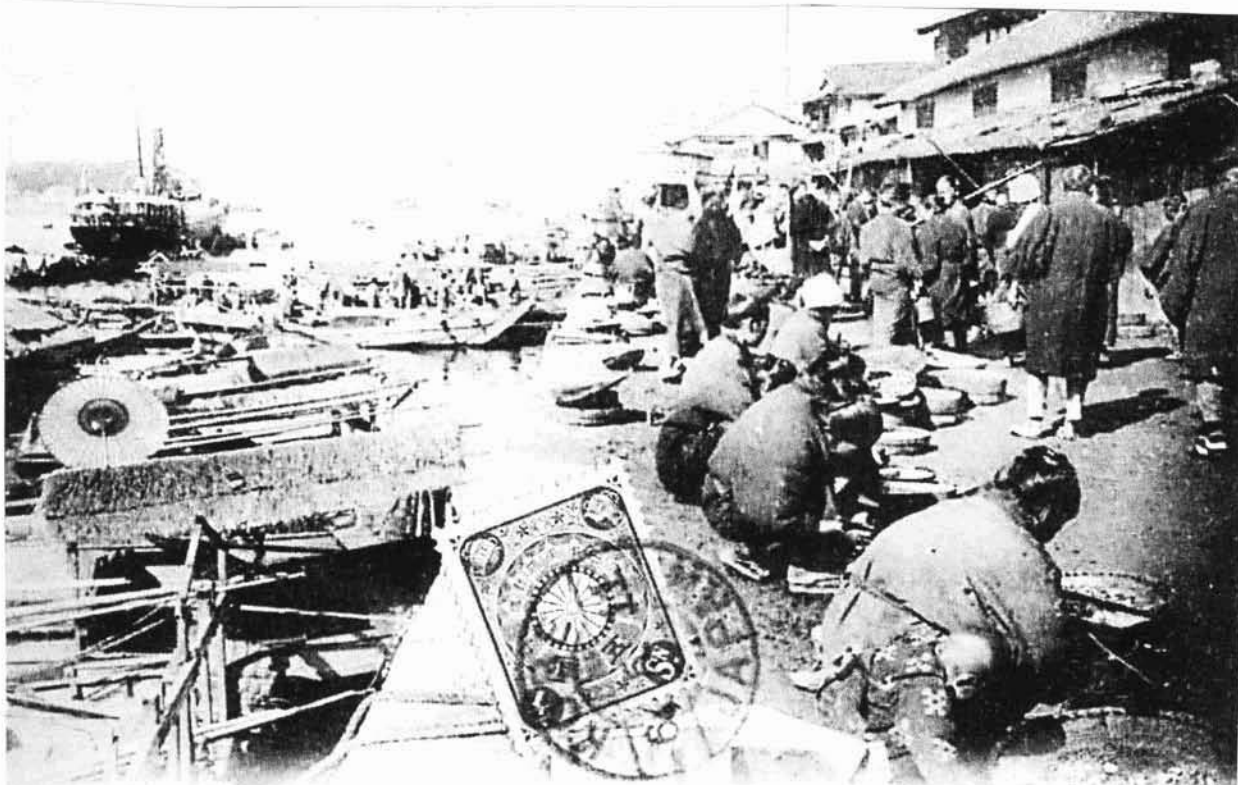
左上の島が駅前から見える「小歌島」で、まだ島は陸続きになっていない。



昭和 30 年ごろの尾道の風景。

この手前に尾道大橋の橋の土台がある。このあたりから放浪記にある「海が見えた、海が見える……」と書いてある風景の場所に当たる。右が「浄土寺」である。

尾道…セピア色の記憶 尾道学研究会 より



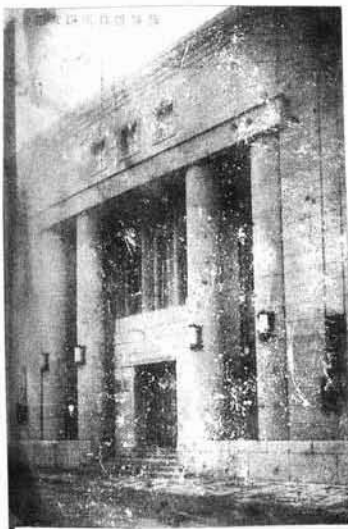
Fish-Market in Onomichi.

尾道の魚市場

尾道の魚市場（明治後期） 旧築出町（中央棧橋西側の突出浜）で開かれている「魚市場の風景。 魚市場は何度も移っている。明治8年には天寧寺大門（東土堂町）にあった魚市場は築出浜に移り、その後桂馬蒲鉾店の南に移転している。 頭に桶をのせている。懐かしい「ばんより」を思い出す風景である。

左の船にある目玉のようなものは番傘である。

尾道…セピア色の記憶 尾道学研究会 より



藝備銀行尾道支店の建物（昭和4年竣工）

堂々とした建物で高い天井と威圧感があった営業室の風景（右） 藝備銀行は「第六十六銀行」や「旧広島銀行」などを中心に7つの地方銀行が合同して大正9年に出来た。六十六銀行の誕生地であったことからこのような立派な建物が作られた。

尾道…セピア色の記憶 尾道学研究会 より

尾道…セピア色の記憶 尾道学研究会 より

尾道郵便局（落成記念の絵葉書）
大正12年落成。昭和30年代頃まではこの局舎があったように記憶している？



局舎全図

尾道市勢要覽

大正十二年度末現在

總說

地勢

尾道ハ廣島縣備後ノ西南ニ位ス北方ニ大寶、摩尼、瑠璃ノ三嶺ヲ負ヒ南方一帶海峡ヲ控ヘ向島其前ニ横ハリテ天然ノ埠頭ヲ成ス是尾道港灣ニシテ烈風海嘯ノ虞ナク東西海門ヲ通シテ船舶出入ノ自由ヲ有ス又陸上ニ在リテハ國道東西ニ通シ北方山陰、山陽交通縣道ノ基点タリ鐵道山陽線ハ市ノ中央ヲ東西ニ貫キ中央ニ停車場ヲ置キ其接續阜頭ヨリ聯絡船ヲ特設シ以テ四國各港トノ交通ニ便ス
其他郵便、電信、電話等各種交通機關ヲ具備シ旅客ノ來往貨物ノ集散繁盛ヲ致セリ

沿革ノ概要

又氣候溫和ニシテ山水ノ風景ニ富ミ恰モ天然ノ一大公園タルノ感アリ
本市ヲ尾道ト稱スルハ其起因明ナラサレドモ昔ハ防地川、長江川、栗原川等ノ河口皆深キ入江ニシテ道路ハ山脚ノ海涯ヲ辿リシコノ山ノ尾ノ路ト云ヘル意ヲ以テテ斯克呼ビシナラン
萬葉集ニ玉ノ浦トアリ後人之レヲ當地ノ古名ナリトスルモノアリ千光寺山ヲ大寶ト云ヒ西國寺山ヲ摩尼(梵語ノ玉)ト云ヒ淨土寺山ヲ瑠璃ト云フモ皆之ニ基クモノカ
本市開發ノ年代ハ詳カナラザルモ社寺ノ緣起ニ淨土寺ハ推古天皇ノ朝ニ、西國寺ハ天平元年ニ、千光寺、良社、元浮御堂ハ大同年中ニ草創ストアルヲ以テ觀ルモ今ヨリ千三百餘年以前タルコトハ確然タリ
又天慶年中伊豫ノ椽藤原純友反スルヤ尾道六郎ナルモノ之ニ應シタルコトアルヲ以テ觀ルモ一千年前ノ一要港タルヲ識ルニ足ル 源平ノ頃大田庄ノ調貢米ヲ本港ヨリ京師ヘ漕運セシカ仁安三年庄ノ倉敷ヲ置キ文治二年庄ト共ニ高野山大塔領トナル建武三年足利尊氏ノ西海ニ走ルヤ船ヲ尾道ニ寄セ尋テ大軍ヲ率ヒ攻メ上リシ時亦來リ泊シ淨土寺ニ於テ觀音經ノ偈三十三首ノ法樂和歌ヲ詠シ以テ法施ニ供シタルコトアリ

おまけの資料

(沿革に書かれていた当時の尾道に
この記述を読んで見て下さい)

(該和歌一卷ハ今現ニ乙種國寶ニ指定セララル)南北朝ノ頃尾道ハ海路ノ一要衝タリシノミナラス陸路モ亦此地ニ係リタルモノト見ユ室町時代明國ト交通ヲ開クヤ貿易船多ク此港ニ出入シ市街益發達シテ商業殷盛トナル降テ徳川幕府ノ時代慶長年中淺野氏ノ封地トナリ正徳年中ヨリ郡政ト分離シ町奉行ヲ置キ之ヲ支配セリ又本市沿海ノ地ヲ築成セラレタルハ元和以前ニ藥師堂濱ヲ元祿二年ニ中濱ヲ同三年ニ荒神堂濱ヲ築キ同十年ニ中濱ヲ増築シ同十一年ニ久保町南裏新開ヲ寶曆五年米場新地ヲ築キ爾後尾崎新開新地等相次テ成ル元文二年時ノ町奉行平山角左衛門ハ埠頭ノ狹隘ニシテ物貨ノ集散運輸ニ不便ナルヲ慨シ灣内浚深築調ノ大計畫ヲ立テ同年ヨリ寛保二年ニ至ル五閱年ヲ經テ荒神堂濱以西中濱以南ノ地ヲ築成セリ則チ今ノ外濱及共同荷揚場ナリ
明治維新廢藩置縣ノ際廣島縣ノ管轄トナリ御調郡ニ屬シ尾崎町、久保町、十四日町、土堂町ノ四ヶ町ナリシカ明治二十一年港灣疏浚ノ事業ヲ起シ御調郡栗原村地先海面ヲ埋立シ同二十一年四月縣令ヲ以テ其地ヲ尾道ノ地籍トシ栗原川以東ヲ東御所町其以西ヲ西御所町ト公稱ス而シテ同年同月町村制ヲ施キ右六ヶ町ヲ以テ尾道町ノ自治區域トセラレ更ニ又明治三十一年四月一日市制ヲ施キ尾道市ノ自治區域トセラレタリ

土		面積		面積	
及	面積	面積	面積	面積	面積
表	0.31	極東	極西	極南	極北
西	東尾崎町防地ヶ鼻	西	南十四日町字藥師堂	北	北十四日町内郷
西	西御所町字祇園町				

 **備陽史探訪の会**

【事務局】

〒720-0824 広島県福山市多治米町5-19-8

TEL 084-953-6157

E-mail info@bingo-history.net

公式サイト

<http://bingo-history.net>